

平成22年 6月 21日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520470  
 研究課題名（和文） 日本語初級学習者の教室外活動を支援するためのカリキュラム開発  
 研究課題名（英文） Development of a curriculum supporting activities of Japanese language beginners outside the classroom  
 研究代表者  
 澤 恩嬉（SAWA EUNHEE）  
 山形短期大学・総合文化学科・講師  
 研究者番号：50389699

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、プロジェクトワークを通して日本語初級学習者の円滑な教室外活動を支援するための効果的な指導法を探った。日本語がほぼゼロに近い学習者に対しては、事前学習の中で語彙や表現、情報提供を明示的に行い、成功体験を増やすことで日本語使用への自信を持たせることが重要であること、日本語がある程度理解できる学習者に対しては、失敗の体験をもとに、学習者自らが活動を振り返り、問題点に気づくよう指導することが重要であることが分かった。

## 研究成果の概要（英文）：

In this study, we searched for effective instruction supporting activities of Japanese language beginners outside the classroom based on data from personal project work. Result shows that for Japanese learners at the very beginning level it is important to explicitly give them words, expressions, and information according to classroom projects and to give them confidence in using Japanese by increasing experiences of success, and that for learners with some ability of understanding Japanese it is important to instruct them to reflect on their activities in the project and to be aware of their communicative problems.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：コミュニケーション教育、プロジェクトワーク、生活支援、自信、気づき

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 実践的なコミュニケーション能力重視  
 研究開始当初、日本語教育においては、総合的なコミュニケーション能力が重視されており、日本の大学に進学する留学生が日本留学試験で測られるのは、日本の大学で学

習・研究活動を行うための日本語コミュニケーション能力とされてきた。

日本留学試験で求められるこうしたコミュニケーション能力の育成のためには、言語習得のみならず、生活上の体験から得られることも重要であり、教室外での様々な活動を

教室内の活動で支え、進めていくことによって、より実践的なコミュニケーション能力の獲得につながると考えた。

一方、コミュニカティブ・アプローチは、このようなコミュニケーション能力の育成に期するとされ、また、構造主義的なアプローチに対する反省から次第に授業に取り入れられるようになってきた。しかし、その効果の実証研究は本格的には行われていないのが現状であった。

## (2) 円滑な生活のための教室内支援

また、「生活者としての外国人」のための日本語教育に目が向けられ、地域における外国人への日本語支援のあり方や支援方法についても数多くの調査・報告がなされていた。

生活者としての外国人には、地域に生活の基盤をおく定住型の外国人のみならず、大学の機関等で学ぶ留学生や就学生も同じく地域の一員として含まれている。

中でも日本で生活しながら日本語を学ぶ学習者は、初級の段階から教室の外で日本語を使って生活していかなければならない環境に置かれており、学習者がスムーズに地域社会に馴染めるように、受け入れ教育機関としての効果的な支援方法が求められていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、初級日本語学習者のより円滑な教室外活動を支援するための、効果的な教室内指導法を探り、カリキュラムを開発することが目的であった。具体的な活動目標としては次の二つがある。

### (1) プロジェクトワークを通じた教室外活動の実態調査

初級の段階から学習者が生活面において必要とされる活動を、プロジェクトワークという手法を通して記録していくことで、学習者の教室外活動の実態を把握する。

### (2) 生活支援のための教室内指導法を探る

学習者が教室外活動を自分で計画し、事前に教室内において様々場面を予想させ、必要な情報および語彙などを提示することによって、円滑に活動を行えるよう手助けをする。さらに、活動後は活動の記録をもとに、問題改善に役立つ学習者へのフィードバックを行う。

## 3. 研究の方法

本研究では、コミュニカティブ・アプローチで評価を得ている、プロジェクトワークという手法を取り入れ、学習者の教室外活動の実態調査および教室内指導法を探った。プロジェクトワークは、本来グループ活動として中級以上の学習段階で用いられることが多

い。しかし、地域社会で円滑に生活できるようにすることを見据え、本研究では、初級の日本語学習者が個人プロジェクトワークとして、学習者一人で一つの活動を完結させる方法をとることにした。

対象とした学習者は、山形短期大学留学生別科の学生で、日本語のレベルによって二つのクラスに分けプロジェクトワークを実施した。3年間の国籍別の人数は以下のとおりである。

	2007年	2008年	2009年
韓国	13 (6)	10 (1)	8 (3)
中国	8 (3)	7 (1)	4 (1)
その他	台湾 1	ミャンマー 1	ミャンマー 2
計	22 (9)	18 (2)	14 (4)

( ) は定住型学習者の人数

プロジェクトワークは、学習者と教師が活動のための準備や振り返りを行う「教室内活動」と学習者が一人で日本語使って実際に活動を行う「教室外活動」に分かれる。期間は4月から7月までの4ヶ月間で、週1回全15回の日本事情の時間において実施した。学習者には、教室内での事前活動を行ったあと、教室外において自分がやりたい活動や与えられたタスクを行わせ、それぞれの活動をICレコーダに記録させた。また、ワークシートに活動内容を記入させ、教師はワークシートと録音データを確認し、次回の教室内活動において活動の振り返りを行った。

プロジェクトワーク実施前には、学習者の日本語使用に対する不安の度合いを問うアンケート調査を行い、教室内で指導を行う際の参考とした。さらに、プロジェクトワーク終了後も同じアンケートを実施、プロジェクトワークによる、学習者の日本語使用への変化を観察した。

研究の1年目は、学習者の日本語レベルに関係なく、全8回のプロジェクトワークのうち、学習者が自分で活動内容を決めて行う「自由プロジェクト」を6回、教師が課題を与え、活動を行わせる「課題プロジェクト」を2回実施した。

研究の2年目以降は、1年目の結果を踏まえ、自由プロジェクトを進めつつも、日本語レベルがほぼゼロに近く、教室外活動に不安を抱く学習者には、教師の方からレベルに合わせたタスクを与えることもあった。

「自由プロジェクト」の場合は、学習者が自由にプロジェクトワークの内容を決め、ワークシートに記入後、教師がそれに対して日本語の表現や活動に必要な様々な情報を提供し活動のためのアドバイスをを行った。学習者は、事前指導をもとに教室外活動を行い、ICレコーダの録音をもとに、活動の結果とうまくいかなかった部分についてのコメン

トや感想などをワークシートに記入し提出した。教師は、提出されたワークシートと録音の記録をもとに、次回の教室活動においてフィードバックを行うという手順で行われた。

「課題プロジェクト」は、「好きな通信販売のカタログを電話で取り寄せる」「夏休み中の旅行計画を立て、電話で問い合わせる」という課題を学習者に与えた。活動の記録は、自由プロジェクトと同様、ワークシートへの記入および IC レコーダによる録音を行ったが、最終の課題プロジェクトでは、学習者が自分のプロジェクトワークを振り返り、分析することができたかを確かめるための項目をワークシートに加えた。

#### 4. 研究成果

ここでは、3年間のプロジェクトワークの実施結果および教室活動における、学習者の日本語レベルに応じた指導法について報告する。

##### (1) 下位クラスの学習者の場合

日本語がほぼゼロに近い学習段階においては、できるだけ日本語を使って「できた」、「通じた」という成功体験を増やすことで、日本語使用への自信につなげるようにした。教室活動においては、教室外活動を行うための事前情報や活動に必要な語彙や表現をできるだけ明示的に提示し、学習者がイメージしやすいように指導した。事前情報や活動に必要な語彙や表現などは、過去の学習者の活動記録から、情報不足によって失敗をしたことや、語彙不足、表現が伝わらずスムーズに活動が行えなかったものを取り上げ、提示した。具体的に行った教室指導は次のとおりである。

##### ①前置き表現の指導

初級日本語学習者の場合、日本語使用への緊張もあり、話しかけ部分がうまく言えないことが多い。実際、初対面の人に前置き表現なしで、依頼や問い合わせを行ったり、会話の目的上必要とされない、挨拶や自己紹介をするなどのケースが活動記録から見られた。また、会話の冒頭でつまづいてしまい、その後の会話が修復不可能な状況にまで陥ってしまうケースも観察された。

会話の開始部、つまり話しかけの部分は、その後の会話の流れに大きな影響を与える重要なきっかけとなる。開始部において円滑に会話を始めるには、会話の目的に応じた前置き表現を意識してもらう必要があった。問い合わせの場面では「ちょっとお聞きしますが」、依頼の場面では「すみません、～たいんですが」などの会話の目的に合った前置き表現の使用を事前活動の際に繰り返し確認

した。また、話しかける際には、「今ちょっといいですか」などと相手の状況を問う表現を加えることで、会話の受け手の反応は大きく変わってくるということも伝えた。これらの前置き表現を事前活動において繰り返し練習したことで、スムーズな会話の開始が可能になった。

##### ②語彙の提示

初級の学習者が教室外活動でつまづくことの一つには、語彙などの不理解による場合が多いが、生活の中で頻繁に使用される聞き慣れた語彙であっても、「お」や「ご」などつくつくと、理解されないことが多いことが分かった。

学習者が生活の中で活動を行う場面の多くは、お客としての立場がほとんどで、当然敬語で対応されることになる。しかし、敬語表現は初級の後半で扱う学習項目であるため、活動の中で理解されない語彙や表現が多いのが事実である。しかし、既習語彙であっても「お名前」「ご住所」などのように「お」や「ご」がつくと分からなくなってしまうことが多い。事前活動では、このような生活の中で使われる場合の語彙の変化にも注目させ、理解を促した。

また、生活の中でよく耳にする敬語表現については、プロジェクトワークの中で自然に導入したため、初級後半の敬語の学習の際には、学習者は敬語の場面が理解しやすく、敬語表現についてもスムーズに慣れていくことができた。

##### ③活動場面の予測

事前指導においては、できるだけ活動場면을イメージさせることも重要である。練習した表現をうまく言えたとしても、相手の反応や答えを予測しておかないと、その後のやりとりがスムーズに行えない場合が多かった。実際の活動場면을イメージしやすくするために、先輩たちの活動を紹介したり、録音を聞かせたりなど、場면을イメージさせたことで、学習者の失敗に対する不安を軽減させることができた。

##### ④段階的なタスクによる指導

課題プロジェクトの場合、電話で問い合わせや依頼をするという、初級の学習者にとっては、難易度が高く、緊張が高まる場面であるため、学習者の課題に対する不安をできるだけ和らげるための段階的なタスクを取り入れた。

まず、電話会話に慣れるためのタスクとしては、番号案内サービスに電話をかけ、問い合わせたい場所の電話番号を聞き取るというタスクと、美術館や博物館などの公共施設に電話をかけ、「開館時間」「入館料」「休館

日」を尋ねるといふ、初級の段階でも行えるタスクを与えた。

また、学習者の発音がうまく伝わらない場合も多かったので、会話の中で特に大事な部分をゆっくりはっきり発音する練習を行った。具体的には、自分の名前と住所、電話番号などを電話で正確に伝えるために、住所の読み方を日本人に聞いて調べるタスクや、対面の場面で自分の住所や名前を日本人に伝え、聞き取ってもらうタスクも実施した。教室内活動においては、緊急時を想定したロールプレイなど、名前や住所を正確に伝える練習なども繰り返し行った。

#### ⑤ブレイクダウン時の対処法

初級前半の学習者の場合、聞き取れない語彙や、理解できなかった部分について聞き返しを行っても、その回答が理解できない場合が多く、うまく修正できないため、コミュニケーションが破綻してしまうケースが見られた。または、学習者が予測しなかった話の展開になったときは、対処が困難になり、パニック状態になることも多かった。このような場合は、会話を修復するというよりは、うまく回避することも必要な場合がある。

「外国人なのでよく分かりません」「もう少し調べてまた来ます（また電話します）」などと相手の了解を得て会話を中断させたり、回避するなどの対処法も事前指導の中に取り入れた。

#### ⑥母語による振り返り

日本語下位クラスの場合、活動前の事前指導を中心に行っているため、活動後の振り返りにおいては、準備した内容をこなすことができたか、目標とした活動を成功させたか、という結果に重点をおいた。活動の数をこなす、成功体験を重ねることで自ら活動に取り組みたいという意欲につなげることを目的とした。学習者には活動を記録するワークシートに、活動で感じたことなどを母語で記入させることで、より正確に学習者の意識が確認でき、学習者自身の意識づけにも役立てることができた。

#### (2) 上位クラスの学習者の場合

日本語の語彙や表現がある程度理解でき、生活の経験もある学習者の場合は、教師が細かい事前指導を行うと、意欲的に活動を取り組めないことがある。この場合は、できるだけ活動前の教室内指導を非明示的に行い、学習者に「自力でやれた」という意識を持たせることがより効果的であることが分かった。具体的な教室内指導には次のような内容を取り入れた。

#### ①非明示的な語彙や表現の導入

語彙や表現の提示を行う際には、下位クラスとは違って、具体的な場面をイメージさせるのではなく、初級段階では扱わないが広く使われる語彙や表現を全体にまとめて提示するようにした。

来日直後に行なわなければならない手続き関係は、初級日本語学習者にとっては難易度の高い活動であるが、その重要度も高いと言える。具体的には、外国人登録、口座開設、携帯電話の契約などである。上位クラスの場合は、最初のうちからこのような難易度の高い活動に積極的に取り組む傾向がある。しかし、このような手続き関係で使われる言葉は、ある程度知識や経験がある学習者にとっても耳慣れないものが多い。教室内の事前指導の中では、過去の活動記録から「暗証番号」や「身分を証明するもの」など、学習者が理解できなかった語彙や表現を抽出し、まとめて提示するようにした。このような語彙を事前に導入しておくことによって、学習者はそれぞれ活動を行う中で自然に思い出したり、活動後の振り返りの際に自分で気づくことができた。

#### ②より正確な理解のための「聞き返し」

学習者の教室外活動の記録を観察すると、知らない語彙や表現があったり、スピードについていけず相手の発話が理解できなくても「はい」と答えてしまうケースがよくある。日本語がある程度理解できる上位クラスの学習者には、大体ではなく、より正確に活動を行ってもらうよう、相手の発話がうまく聞き取れない場合の対処法として、「聞き返し」のストラテジーを早い段階で導入した。

学習者がよく使用する「もう一度お願いします」という漠然とした聞き返しでは、意図とした回答がうまく得られないことが多かったため、相手の発話の中から、聞き取れなかった部分に焦点をあて、聞き返す練習を行った。例えば、聞き取れなかった部分の一部を繰り返し、その続きを言ってもらったり、「え?」「〇〇のことですか」などの表現を使った聞き返しの練習も行った。このような聞き返しの練習によって、学習者は自分が理解できなかった部分をただ聞き流すのではなく、分からなかった部分に注目し、正確に聞き取ることを意識するようになった。

#### ③失敗体験の活用

上位クラスの場合、意欲的に活動を行ってもらうために、最初のうちはなるべく教師による情報提供やアドバイスを少なくし、積極的に教室の外に出て様々な活動を行ってもらった。ある程度生活経験がある学習者は最初のうちから難易度の高い活動に取り組むことが多く、準備不足や情報不足などが原因でうまくいかないケースも多く見られた。学

習者はこのようなちょっとした失敗を体験することで、自分の活動を振り返るきっかけとなり、次の活動にも影響を与えた。また、教室内事後活動において、学習者同士がそれぞれの活動内容を紹介し、必要な情報を共有する時間を設けた。学習者自らの体験を通して得られた情報や注意事項を他の学習者に紹介したり、多くの人が聞き取れなかった語彙や表現などをディクテーションの形でクラスワークに取り入れ確認を行うこともできた。

一方で、学習者の日本語能力に比べ、難易度の低い活動を選んで、簡単に終わらせてしまい、なかなか向上が見られない学習者には、教師の方からある程度難易度のあるタスクを与え、行ってもらうこともあった。例えば、自分の名前や住所の漢字を日本人に説明するなどのタスクでは、学習者は自分の発音が意外に伝わらないことを体験し、相手に理解してもらうためにはどのような工夫が必要なのかを考えさせる活動につながられた。

#### ④段階的に気づきを促す振り返り

ある程度知識や経験がある初級学習者は、少し慣れてくるとプロジェクトワークそのものに飽きてきたり、結果だけに注目し、ワークシートには「成功した」という記述が多くなる。教師が不足しているところや誤用などを事後指導すると、意欲を低下させる学習者も見られ、フィードバックを行うことが困難な場合もあった。このような学習者には、「大体できる」ことから「より正確にできる」ことを目標に、また、「自ら問題点に気づいて修正できる能力」を育成することを目的とした活動を行った。

学習者は、教師からの簡単なタスクを繰り返して行っているうちに、自分の活動の不適切さに気づき修正をする場合と、活動の録音を聞き直す段階で気づく場合、ワークシートに記入していく段階で気づく場合もある。または、なかなか学習者が気づけない場合、ワークシートに教師がコメントを書くことで、気づいてほしい部分を学習者に注目させて気づかせることもある。このように、できるだけ学習者自身が活動を振り返り、不適切さに気づけるように、段階的に気づきを促すための工夫をした。

最初のうちはなかなか自分で気づくことができず、教師の助けを得て修正を行っていた学習者が、プロジェクトワークの終了時には、活動を振り返り、自ら問題点を見つけ出すことができた。学習者は繰り返し相手の発話や自分の発話を聞き直し、注意を向けることによって、活動を自分の力で修正できる能力を身につけられることが分かった。

最終課題のワークシートには、「相手には〇〇と聞こえたんだと思います」、「〇〇が問

題だったと思います」といった学習者自身が活動の中で気づいた、発音や活動内容の不適切な部分についての報告も見られた。

#### (3) 本研究の国内外における位置づけ

大学、短大をはじめとする、日本語教育機関においては、多くの場合、学習者の日本語学習を担う部分と、生活の支援を担う部分は一致していないのが現状である。しかし、日本の教育機関で学ぶ日本語学習者は、日本語の習得と共に日本での生活のための様々な知識やノウハウを同時に習得していくことを望んでいることが多い。本研究では、このような学習者のニーズに応えるべく、日本語学習支援と生活支援を同時に行うことを目的に研究を進めてきた。その結果、日本語学習があまり進んでいない段階から、コミュニケーション能力の向上と共に、円滑な日本での生活に役立てられる効果的な指導法を探ることができた。

また、本研究は初級日本語学習者の実際の教室外活動の記録をもとに、その実態を分析したという点においても大変意義深いと考える。学習者が普段の生活の中でどのような活動を行い、どのような問題に直面しているのかの実態を把握できたことによって、実生活で学習者に必要とされる日本語能力についても方向性が示されたと言える。

#### (4) 今後の展望

本研究の目的は、初級日本語学習者の生活支援および学習支援を目指した効果的な教室外指導法を探ることであった。プロジェクトワークを通して、学習者の教室外活動の実態を調査した結果、初級の段階で学習する語彙や文型表現を使ってできる教室外活動は非常に限られたものが多く、実際に使用される語彙や表現は、教科書では学習しない形で使われていることが多いことが分かった。しかし、学習者は来日直後からこれらの語彙や表現を耳にしながら、生活していかなければならない。学習者がより円滑に生活していくための支援を行うためには、実際の生活場面で使用される語彙や文型表現の中から、使用頻度や重要度の高いものを優先的に導入するための工夫が必要であると考えられる。

また、このような生活支援が、学習者にとって有効なものとして、生活や日本語学習に役に立っていることを、学習者自身が感じ、より積極的に教室外活動に取り組めるようにしなければならない。今後は「日本語ポートフォリオ」の導入を試み、学習者が自分の活動を記録し、客観的に評価できるように工夫していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 後藤典子、澤恩嬉、渡辺文生、山上龍子、  
初級学習者の自然会話に見られたコミュニケーション上の問題の分析、山形短期大学紀要、査読有、第40集、2008、17-35
- ② 澤恩嬉、後藤典子、渡辺文生、山上龍子、  
「依頼の電話」の開始部における初級日本語学習者の談話管理、山形短期大学教育研究、査読有、第7号、2007、13-25

[学会発表] (計3件)

- ① 澤恩嬉、後藤典子、渡辺文生、山上龍子、  
初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内活動とその課題—学習者の日本語レベルと日本語使用の不安の観点から—、日本語教育方法研究会、2010年3月27日、東京農工大学
- ② 澤恩嬉、後藤典子、渡辺文生、山上龍子、  
初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内指導—電話による問い合わせ・依頼の場面を中心に—、日本語教育方法研究会、2008年9月20日、愛媛大学
- ③ 後藤典子、澤恩嬉、渡辺文生、山上龍子、  
個人プロジェクトワークにおける学習者の気づきを促すためのフィードバックの試み—教室外の言語環境を構築するために—、日本語教育方法研究会、2007年9月22日、京都教育大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

澤 恩嬉 (SAWA EUNHEE)  
山形短期大学・総合文化学科・講師  
研究者番号：50389699

### (2) 研究分担者

後藤 典子 (GOTO NORIKO)  
山形短期大学・総合文化学科・講師  
研究者番号：50369295  
渡辺文生 (WATANABE FUMIO)  
山形大学・人文学部・准教授  
研究者番号：00212324  
山上龍子 (YAMAKAMI RYUKO)  
山形短期大学・非常勤講師  
研究者番号：90461722